ドーナツ分のやちよこ

西海
炯

- ・ヒロタユウキ(31) ……学習塾講師。
- ・シミズユウ(44) ……ユウキの中の数学クラスの生徒。
- ・ストウリサコ(44) ……ユウキの中の数学クラスの生徒。
- ・タカギシロウ(59) ……学習塾経営者、塾講師。ユウキの雇用主。
- ・サヤマサキ(34) ……主婦。ユウキの姉。
- ・カワカミミドリ(39) ……大学勤務の助教。ユウキの元同僚。
- ・ヤマカワトオル(6) ……タカギの高1英語クラスの生徒。

大学を退職し、個人経営の小さな学習塾で働くユウキは、なかなか成果を出せず、迷いを抱えながら日々を過ごしている。自分なりに生徒と関わる中で、小さな手応えを得るも気持ちは晴れない。だが研究者時代を懐かしく思い出すことはあれど、もう戻れないことも理解している。恵まれた環境で得た研究職を自ら手放した罪悪感から、実家とも距離を置いている。そんな様子を見かねた姉に自宅に招かれる。手厳しい姉の追及に何とか言い返すうちに、自分の本心と向き合うことになる。理想の自分でいらなかった悔しさを認めるユウキに対し、姉は彼自身が無意識に他者に与える優しさ、彼の美德を示す。気持ちを整理したユウキのもとに、「研究者に興味がある生徒に話をしてほしい」という依頼が舞い込み、身構えつつも真摯に生徒の悩みに向き合う。生徒との対話から、「教育」という仕事のやりがい気づき、少しずつ前を向けるようになる。

第1話

○塾の教室・中2数学クラスの授業中

ホワイトボードに数式を書きながらぼそぼそと話すユウキ。
生徒達は静かだが、寝そうになっている生徒もいる。

○塾の廊下

授業を終えて講師控室に戻るユウキ。
別の教室から聞こえる楽しそうな声に立ち止まり、手元の
プリントの束を見つめる。

○塾の教室・授業後

ホワイトボードの文字を消しつつ、教室を出て行く生徒達の
様子を伺うユウキ。

帰り支度が遅れて一人残ったシミズに声をかける。

ユウキ 「シミズさん、ちょっとだけいいですか？」

シミズ 「……はい」

ユウキ 「宿題についてなんだけど」

シミズ 「忘れすぎですよね。すみません、次はちゃんとやります」

ユウキ 「いや、もしやりづらいならやり方を考えようかと……」

シミズ 「……ただサボってるとは思わないんですか？」

ユウキ 「え？うーん……だとしても理由はあるだろうし」

シミズ 「……」

シミズ、意外そうな顔をする。

ユウキ 「単純に量が多いとか、授業分ばかりにいくとかだったら俺が
気をつけないといけないことなので……」

シミズ 「先生で結構しゃべるんですね」

ユウキ 「え」

シミズ、少し迷った後話し出す。

シミズ 「理由……なんか家で問題見ると『これやって何になるんだ
ろう』って考えちゃって進まなくて」

ユウキ 「『苦手だな』が強くなっちゃうのかな」

鞆の中のテキストに視線を向けるシミズ。

シミズ 「そりゃ将来使う人は必要ですけど、私にいるっていう」

ユウキ 「なるほど」

シミズ 「いらなくないですか？」

ユウキ 「それを今判断するのは難しいな」

シミズ 「うーん……使わない気がします」

ユウキ、少し考える。

ユウキ 「……筋トレかな」

シミズ 「筋トレ……？」

ユウキ 「数学に限らずだけど、覚えるとか、難しい問題を解くとか

は、全部頭を使うトレーニングになってると思うよ」

シミズ 「……」

ユウキ 「苦手な科目とか、大変な時もあるとは思っただけど、その

分脳が……鍛えられて……若々しく元気に過ごせるんですか

ね……？」

シミズ 「私に聞かれても……」

ユウキ 「……とりあえず、筋トレのつもりでやってみて……あ、あ

と『5分だけ』と思って始めると意外と続けられるらしい」

シミズ 「……まあはい、ありがとうございます」

シミズ、笑いながら返事をする。

ユウキ 「引き留めてごめんなさい、気をつけて帰ってね」

シミズ 「はい、さようなら」

○塾の講師控室

生徒の定期テスト結果を見て、成績表ファイルに書き込みながらため息をつくユウキ。

スマホのLINEの通知音がなる。

母さん…今度の連休、帰ってきたら？

数秒見つめた後、「考えとく」と返す。

○自宅・夜

薄暗い居間で塾長タカギと電話をするユウキ。
タカギ「お疲れ様です、今大丈夫？」

○塾の講師控室

講師控室でファイルをめくりながら電話をするタカギ。
棚に並ぶファイルには、学年・教科・単元ごとにラベルが貼られている。

タカギ「……演習用プリントが奥の棚にあるので、間違えた問題に合わせて渡してあげてください。枚数が多い子は……」

○自宅・夜

メモを取りながら電話をするユウキ。

タカギ「そうだ、今日もちよつと授業覗いたけど、前より良くなってるよ！シミズさんと話したっていうのもすごく良いね」

ユウキ「ありがとうございます……」

タカギ「この調子でなるべく皆に声をかけるようにしてね」

ユウキ「はい」

タカギ「じゃ、引き続きよろしくね」

ユウキ「お疲れ様です、失礼します」

ユウキ、通話を終え、スマホの画面を見る。

ユウキ「優しいんだよね……」

ユウキ、ブラウザを開き検索バーに「仕事 辞め方 優しい

上司」と入れて検索ボタンを押そつとする。

その瞬間メッセージ通知が出る。

転職ネット…おすすめの求人が1件アップされました！

少しためらった後スマホの画面を消し、テーブルに置く。

○塾の教室・授業中

生徒達が問題を解く間、授業前に集めた宿題をぼんやりした表情で確認するユウキ。

その中にシミズの物を見つけ、はっとした後笑顔になる。

○塾の廊下(授業後)

シミズが同じクラスの女子生徒スドウと立ち話をしている。
ユウキが横を通ると、スドウが声をかけてくる。

スドウ「あ、ヒロタ先生。先生って大学の先生やってた？」

ユウキ「え」

シミズ「この前みんなの名前検索してて……」

スドウ「それで、ヒロタユウキはなんか研究室？のホームページが
出てきたから」

ユウキ「……」

スドウ「先生？」

ユウキ「あ、うん。実はね」

シミズ、少し気まずそうな顔になる。

スドウ「ふーん。あ、パワハラ？」

シミズ「すーちゃん」

ユウキ「違うよ。あ、そろそろ次の授業始まりそう」

スドウ「ほんとだ！じゃ、先生またね！」

シミズ「……失礼します！」

あわてて教室に戻る生徒たちを見送るユウキ。

○自宅・居間

夕飯を食べながらスマホで求人情報を見るユウキ。箸は組み
合わせが間違っている。

転職ネット…あなたの経歴にマッチした求人が6件あります！
研究職の求人を見ながら苦い顔をするユウキ。

そこに姉からのメッセージ通知が入り、少し迷って開く。

「LINEには動画へのリンクとインタビューを受ける女性のサム
ネイルが表示されている。

「これからの輝く女性たち 研究者カワカミミドリ」

「LINEを見て驚き、スマホを置き眉間を揉むユウキ。

そのまま後ろに倒れ込み、目を閉じる。

第2話

○自宅・居間

散らかった部屋で寝転がりながらスマホを見るユウキ。

姉ちゃん…これユウキがいた研究室の人だよな？

(インタビュー動画へのリンク)

○インタビュー動画

ナレーター「これからの輝く女性たち。第4回は Σ 大学のオオノ研

究室助教のカワカミミドリさんにお話を伺いました」

パリッとした白衣を着て実験をするカワカミ。

カワカミ「出産前に一度職を辞したのですが、娘が幼稚園の年中さ

んのころ、夫の転職もあり、相談の結果、研究に復帰するこ

とになりました」

学生達とホワイトボードを使いながら議論するカワカミ。

カワカミ「私の研究分野は幸いにして時間の融通が利く方なので、

実験等は学生たちとも相談しながらしっかりやり、調査や執

筆、データ整理などは一部持ち帰ったりして、なるべく家族

と過ごす時間を持つようにしています。自分の夢を追う私を

応援してくれる夫や娘には頭が上がりません」

学内のカフェでインタビューアと笑顔で話すカワカミ。

カワカミ「研究者に限らずですが、女性はライフステージの変化に

よってキャリアの断絶が起きやすいと思います。研究者も質

はもちろんです、手を動かした量が物を言う部分もあり、

悔しい思いをしたこともあります。ただ、後輩達のロールモ

デルとまでは言わずとも、モデルケースの一つになればと

思います」

○自宅・居間

インタビュー動画を見終わり、軽く首をかしげるユウキ。

○回想・大学の廊下・夜

鞆を持って研究室を出るユウキ。

廊下の隅で電話をしているカワカミ。

カワカミ「……ママお仕事終わらなくて……今日もパパと先に寝て……うん……すごいじゃん！……そうだよ、ごめん、明日はちゃんというから」

カワカミと会釈を交わしつつ通りすぎるユウキ。

カワカミ「……ありがとう、おやすみ」

電話を切りスマホをポケットに仕舞うカワカミ。

カワカミ「ああもう……！」

カワカミの叫び声にビクツとなるユウキ。

そのまま二、三步進んだ後、カワカミの前まで引き返す。

カワカミ「ごめん聞こえたよね……」

ユウキ「はい……まあでも学生はもうみんな帰ってます」

カワカミ「ならセーフ」

ユウキ「お子さんですか？」

カワカミ「そう。また約束破っちゃった……」

悲しそうな顔で頭を抱えるカワカミ。

ユウキ「出張帰りでしたよね？直帰しても良かったんじゃない」

カワカミ「そのつもりだったんだけど、こないだの論文、リジエク

トされてさあー！」

ユウキ「うわ……」

カワカミ「まあ弱かったところをしっかり突かれたわ……で、急遽

先生と話したりデータ見直したりしたらこんな時間」

ユウキ「お疲れ様です……」

カワカミ「でも今日やることじゃなかったかも……何やってんだろ

私……モモカごめんね」

一人でわめくカワカミに沈黙するユウキ。

そんなユウキを恨めしそうな顔で見返すカワカミ。

カワカミ「……叫ぶくらいならやめたら良いのと思ってる？」

ユウキ「えっ!？」

カワカミ「私がやめたら一つポスト空くしね」

ユウキ「いやいやいや……」

焦るユウキを見て笑うカワカミ。

カワカミ「ごめんごめん。ヒロタ君はそんな人じゃないよね」

ユウキ「……」

カワカミ「まあもつと野心あっても良いと思うけど」

ユウキ「……俺もカワカミさんみたいなガッツがほしいです」

カワカミ「ガッツねえ」

ユウキ「お子さんがいて、一回離れてまた研究に戻ってきたところ

からしっかり成果あげてるの、本当にすごいですよ」

カワカミ「ありがと。でも私も『もう全部やめちゃおうかな！』っ

て時は多々あるよ」

ユウキ「え……」

カワカミ「ただ研究に没頭できてた頃のこととも思い出しちゃうたり

するし」

ユウキ「それは……」

カワカミ「でも、どっちも大事だし私にしかできないからね」

ユウキ「……」

カワカミ「あくあ、私が二人いればいいのに！いや三人かな」

ユウキ「三人目は何を……？」

カワカミ「研究！次の論文は通す！」

ユウキ「カワカミさん二人分はやばいな……」

カワカミ「あはは。まあ一人でできるだけ頑張ります！」

ユウキ「無理はし過ぎないくださいね」

カワカミ「ヒロタ君もちゃんと帰って休みなよ？最近顔色悪いよ」

ユウキ「……寝不足で」

カワカミ「なのに付き合わせてごめん。色々ありがとね」

ユウキ「いえ、じゃあお先に」

カワカミ「おつかれさま」

○自宅・居間

カワカミの前向きな姿を思い出し、微笑むユウキ。

仕舞い込んでいた研究分野の本を取り出して読もうとする。

ページをめくるうちに表情が曇り、本を閉じる。

○回想・大学・廊下

大学に置いていた荷物を片付け、持ち帰ろうとしているユウキを見つめ、走り寄るカワカミ。

カワカミ「先生から聞いたよ。本当にやめちゃうの？」

ユウキ「……はい」

カワカミ「体調の問題は仕方ないけど、もったいないな……ヒロタ君にしかできないこと、あるよ」

ユウキ「……すみません」

カワカミ「……まあ戻りたいと思ったときは連絡ちょうだい。先生にでも良いけど、私でも」

ユウキ「ありがとうございます」

○自宅・居間

本を元の場所に仕舞い込み、ため息をつくユウキ。

食卓に戻ってスマホを手に取り、姉のメッセージ画面をぼんやり眺める。

突然、姉から電話がかかってくる。

ユウキ「うわっ……もしもし？」

○サキの家・居間

照明が消えた居間。子供のぐずる声が出ている。

床には割れたガラスの破片が散乱している。

サキ「ごめん、ちょっと助けてほしいんだけど」

疲れた顔で電話をするユウキの姉・サキ。

第3話

○サキの家・居間

食卓の椅子に乗り電球を替えるユウキとそばで見守るサキ。

サキ 「ありがと〜昨日夕飯食べようとした瞬間切れちゃって」

ユウキ 「これ姉ちゃんでもギリ届くんじゃない……?」

サキ 「シヨウタが必死で止めるのよ……前に幼稚園で椅子ごとひっくり返る先生を見ちゃったらしくて」

ユウキ 「それはシヨックかもな……」

ユウキが持ってきたドーナツの箱を覗いて笑顔になるサキ。

サキ 「あれ、これ抹茶!？」

ユウキ 「うん」

電球を替え終わり、慎重に椅子から降りるユウキ。

サキ 「ユウキが塾の先生になって来るの初めてじゃない?」

サキ、冷蔵庫から麦茶を出して二人分のコップに注ぐ。

ユウキ 「……そうだね、久しぶりかも」

ユウキ、少し気まずそうな顔になる。

サキ、コップを置きながらユウキの向かいに座る。

サキ 「買ってきてくれた限定のやつもらっちゃおう。半分こね」

ユウキ、苦笑しながらドーナツを受け取りテーブルに置く。

サキ、嬉しそうにドーナツを食べ始める。

ユウキ、麦茶を飲む。

(※塾の話が終わるまでドーナツは食べない)

サキ 「あなたは今日は休み?」

ユウキ 「俺は水曜は授業がなくて、あと日曜は塾自体が閉まる」

サキ 「一応週休二日か」

ユウキ 「うん。塾長は基本いるみたいだけど」

サキ 「じゃあ忙しいから実家に帰らない訳ではないのね」
体を固くするユウキ。

サキ 「たまには帰ったら?そんな遠くないし、日帰りでも」

ユウキ 「……そのうちね」

サキ、ため息をつく。

サキ 「今日呼んだのはこの話をするためなのよね」

ユウキ「だろうと思った」

ユウキ、諦めた顔で座り直す。

サキ「いつから帰ってないの?」

ユウキ「……大学やめてから」

サキ「半年くらいか。電話にも出ないって文句言ってたわよ」

ユウキ「母さん話長いから」

サキ「わかるけど。帰らない理由は?」

ユウキ「なんか……母さん達と何話せばいいかわからなくて」

サキ「近況でしょ」

ユウキ「そうなんだけど……」

サキ「まあ仕事の話じゃない?転職したんだし」

ユウキ、無言でうつむく。

サキ「仕事楽しくないの?」

ユウキ「……そういうことじゃない」

サキ「じゃあ何」

ユウキ、語気が強くなるサキに焦りためらいつつ口を開く。

ユウキ「どの面下げて……仕事の話をするんだよ……」

サキ、驚いた顔をする。

サキ「塾の先生なのが恥ずかしいってこと?」

ユウキ、サキの言葉に立ち上がりかける。

ユウキ「そうじゃなくて!」

サキ「びっくりさせないでよ」

ユウキ「ごめん。だって人より長く学生やってさ」

サキ「それは二人とも賛成してたじゃない。大学の仕事にも就け

て……」

ユウキ「なのにすぐ体壊した!」

サキ「無理したのはよくないけどさ」

ユウキ「で、そのまま辞めて……」

サキ「……まあびっくりはしたけど、ちゃんと次の仕事見つけて

るじゃない。何が問題なの?」

ユウキ、考えながら話す。

ユウキ「……なんかしょぼいなって」

サキ「何が?」

ユウキ「……俺、自分で決めたことも続けられないんだなって」

サキ 「……」

ユウキ 「俺がもやもやしてる間もさ、塾長は生徒のために頑張ってるのに……他の先生達だって……」

サキ 「それであなたは適当にやってるの？『俺には無理』って」

ユウキ、顔をあげる。

サキ 「違うでしょう？」

ユウキ 「……違う」

サキ 「じゃあ」

ユウキ 「でも……」

サキ、大きなため息をつく。

サキ 「要は挫折したことが引っかけかかってるってこと？」

ユウキ 「挫折っていうか逃げたっていうか……」

サキ 「変わらない気がするけど」

ユウキ 「たぶん大してやりたいことじゃなかったんだ」

サキ、険しい顔になる。

サキ 「そこ否定するの？馬鹿じゃないの？」

ユウキ 「馬鹿って」

サキ 「やりたいことじゃないのに何年も頑張れる？こんな風に引きずる？それなら確かに馬鹿だけだ」

ユウキ 「……」

サキ 「あなたがやりたかったことを続けられなくなったなら『挫折 折 でしょっ』」

ユウキ 「……できれば研究を続けられる自分でいたかった。でも無理だってこともわかつちやっただんだ」

サキ 「うん」

ユウキ 「今の仕事だってやりがいあるし、ちゃんとやりたいと思ってるんだ。本当に」

サキ 「あなたが今頑張ってるならそれで良いのよ」

サキ、キッチンに移動し、鍋やコップを洗い始める。

サキ 「塾の先生、結構向いてると思うけど」

ユウキ 「え」

サキ 「相手が誰でもちゃんと話聞けるでしょう」

ユウキ 「そう……？」

サキ 「シヨウタのお喋りにもちゃんと付き合っただけだし」

ユウキ「あの子の話面白いから……」

ユウキ、ドーナツを食べ始める。

サキ「あとね、それもあなたの良いところ」

ユウキ「うん？」

洗い物を終え、ユウキの食べているドーナツを指さすサキ。

サキ「ちょっとしたことをプラスでできるの、何となくかもしれないけどこっちは方は嬉しいもん。そういうのって大事よ」

ユウキ「……うん」

サキ、居間に戻り壁の時計を見る。

サキ「そろそろ幼稚園のバス来る時間だ」

ユウキ「一緒にいっていい？」

サキ「シヨウタ喜ぶわ」

サキ、立ち上がり柵から鍵をとって玄関に向かう。

ユウキ、立ち上がりキッチンでドーナツのゴミを捨てる。

ユウキ「これでよし」

スッキリした顔になり、廊下にいるサキに話しかける。

ユウキ「話聞いてくれてありがとう」

サキ「かわいい弟ですからね。美味しいドーナツ買ってきてくれるし」

ユウキ、笑顔で居間を出る。

○塾・講師控室

授業準備をしながら話すユウキとタカギ。

タカギ「そっだ、明日の1限の前なんだけど、30分くらい時間もらえる？」

ユウキ「大丈夫です」

タカギ「僕のクラスで、ちょっと話してあげてほしい子がいて」

ユウキ「話ですか？」

タカギ「獣医学部志望なんだけど、研究者がどんな仕事なのか知りたいて言ってるんだよね。お願いできないかな」

ユウキ「研究者……」

複雑な表情でつぶやくユウキ。

第4話

○塾の教室・授業前

教室で適当な席に座って向かい合うユウキとヤマカワ。

ヤマカワの鞆には三毛猫のキーホルダーがついている。

ユウキ「獣医さんかあ」

ヤマカワ「まあ成績も悪くないですし、順調です」

ユウキ「でも研究者も気になってると」

ヤマカワ「まあ、はい」

xxx

立ってホワイトボードも使いながら説明するユウキ。

熱心に聞くヤマカワ。

ユウキ「まあこんなところかな。分野によっても雰囲気違うから、

参考程度になっちゃうんだけど」

ヤマカワ「ありがとうございます」

ユウキ、ちらりと壁の時計を見る。

ユウキ「俺からも聞いていいかな？」

ヤマカワ「何ですか？」

ユウキ「研究者が気になったきつかけとかってある？」

ヤマカワ、少し緊張した顔で答える。

ヤマカワ「何年か前に猫の腎臓病の特効薬研究の寄付を集めてた

話って、知ってます？」

ユウキ「ああ、ニュースになってたね」

ヤマカワ「猫は元々腎臓病のリスクが高いんですけど、その薬がう

まく行ったら寿命も伸びます」

ユウキ「すごいことだよなあ」

ヤマカワ「猫飼いの全員の希望です」

ユウキ「熱いね」

ヤマカワ「これで猫のための仕事、薬や病気の研究もあるのかと

思ったんですよね」

ユウキ「なるほどね」

うなずきながら聞くユウキ。

ヤマカワ「でも親には言ってなくて」

表情が曇るヤマカワ。

ユウキ「……」

ヤマカワ「ヒロタ先生は何で研究者になろうと思ったんですか？」

「瞬ためらった後素直に答えるユウキ。

ユウキ「……大学で先輩についてやってた触媒の効率の研究が、地

味だけど面白かったからかな」

ヤマカワ「……」

ユウキ「なるうと思っただのは大学入ってからだよ」

ヤマカワ「でも『これがやりたい』っていうのがあったんですよ

ね……」

ユウキ「今やりたいことが見えてるの、珍しい方じゃない？」

ヤマカワ「そうなんですけど……」

ユウキ「……まあ、そこじゃないか」

ヤマカワ「小さい頃から言ってたから、親もずっと獣医の夢応援し

てくれてるんですよ。頑張ってるね、みたいな」

ユウキ「うん」

ヤマカワ「なのにここでいきなり研究者って」

ユウキ「……」

ヤマカワ「しかも断言はできなくて……獣医だって憧れだし」

ユウキ「絞らないと、って悩んでるのかな」

ヤマカワ「……」

ユウキ、大学ホームページをプリントアウトした紙を出す。

ページのトップには「卒業後の進路」と書かれている。

ユウキ「これを見てほしいんだけど」

ヤマカワ「調べてくれてたんですか？」

ユウキ「卒業後すぐに動物病院に勤める人、半分くらいらしい」

ヤマカワ「そうなんですか？」

ユウキ「公務員も結構多いな……で、『進学』ってなってるのが卒

業後も大学に残って研究をする人だね」

ヤマカワ、並べられた紙を見比べる。

ユウキ「国公立の方が『進学』は多いかな……。大学院は研究室で

選ぶから、一概には言えないけど」

ヤマカワ「そうなんだ……」

ユウキ「ということで、獣医さんを目指した上で研究の道に進むパ

ターンもあるし、製薬会社に就職するパターンもある」
ヤマカワ「はい」

ユウキ「研究を経て専門分野を極めた獣医さんになる場合もある。
たぶん将来の道、今想像してるよりも色々だよ」

ヤマカワ「そうか……」

ユウキ「それにご両親も、ヤマカワ君が頑張って叶えるなら何だって良いんだと思う」

すっきりした顔で頷くヤマカワ。

ヤマカワ「これらについてもいいですか？」

ユウキ「もちろん。全部じゃないから、他の大学のも見てみてね」
ヤマカワ「はい」

紙をまとめているヤマカワを見ながら腕を組むユウキ。

ユウキ「創薬かあ……やっぱりロマンあるよね……」

ヤマカワ「ロマン？」

ユウキ「もし難病を治す薬を作れたらさ」

ヤマカワ「はい」

ユウキ「一人の医者が生涯で診られる患者の何百倍、何千倍の数を
救うことになるんだよな」

ヤマカワ「……」

目を見開くヤマカワ。

ユウキ「もちろん獣医さんと、その後ろで獣医学や薬学を研究する
人、薬を作る人、みんなの力を合わせてだけど」

ユウキ、研究者を志した時の気持ちを思い出しながら話す。

ユウキ「創薬自体が色んな分野の成果の結晶だし。俺が見てた触媒
もどこかでは繋がってたりしてね……どんな研究も一人一人
の積み重ねなんだよ」

真剣な顔で聞くヤマカワ。

ユウキ「まあやめた俺が偉そうなこと言えないんだけどね」

気まずそうなユウキには構わず、考えるヤマカワ。間。

ヤマカワ「……その感じでいくと」

ユウキ「うん？」

ヤマカワ「僕が将来何かですごい成果を出したら、ヒロタ先生もそ
の積み重ねの一つなるんですかね？」

ユウキ「え……」

ヤマカワ「や、わかんないですけど。話聞いて良かったなと思ったんで」

ヤマカワ、プリントアウトをめくりながら言うが、途中で照れ臭くなり視線をそらす。

ユウキ、胸がいつぱいで泣きそうなのをこらえてうなずく。

ユウキ「そうか……そうなたらいいな」

ヤマカワ「とか言って普通に獣医になるかも」

ユウキ「それだっすすごいことだよ。俺はめちやくちや嬉しいよ」

急に真顔で断言するユウキを見て笑うヤマカワ。

○塾・ロビー

ポスター類を貼り替えながら話すユウキとタカギ。

タカギ「ヤマカワ君の件、ありがとね」

ユウキ「いえ……」

タカギ「すごい感謝してたよ。彼、いつもはクールなんだけど」

タカギの方を見て驚いた後、視線を手元に戻すユウキ。

ユウキ「……なんか、むしろありがたかったです」

タカギ「うん？」

ユウキ「こっちも背筋が伸びるといっか」

タカギ「ヒロタ先生のそういうところ、すごく良いよね」

ユウキ「えっと」

タカギ「子供達の話ちゃんと聞いてくれたり、色々考えて準備してくれたり。それが当たり前なものね」

ユウキ、タカギの言葉を噛み締め、壁に貼られた生徒の目標などが書かれている紙を見つめる。

ユウキ「頑張れる気がしてきました」

タカギ「フフフ、この仕事の楽しさわかってきたんじゃない？」

ユウキ「はい」

穏やかな笑顔で頷くユウキ。

○塾・昼間(夏)

明るいロビー。ポスターや生徒の目標でにぎやかな壁。

夏期講習のポスターも貼られている。

xxx

まだ誰もいない教室。穏やかな空気が流れている。

○電車・車内(数日後)

扉の近くに立つユウキ。手にはドーナツの箱を持っている。
車内ディスプレイのニュースに映るカワカミに笑顔になる。

○実家・外

少し緊張した顔のユウキ。
よし、と気合いを入れてドアを開ける。

ユウキ「ただいま」

○実家・居間

居間で母にドーナツの箱を渡すユウキ。
中を見て顔がパツと明るくなる母。

○実家・ユウキの部屋

研究関連のノートや本が入った段ボールを漁るユウキ。
ノートを取り出して眺めるユウキ。
表紙には「研究ノートNo.173」と書かれている。
ノートを丁寧に段ボールに戻したところで新品のノートを見
つける。取り出して机の前に座り、少し考えてペンを取る。
ユウキ母「ユウキはどれにするのー？」
ユウキ「チヨココか抹茶！」
部屋を出るユウキ。

机には『授業研究No.1』と書かれたノートが置かれている。